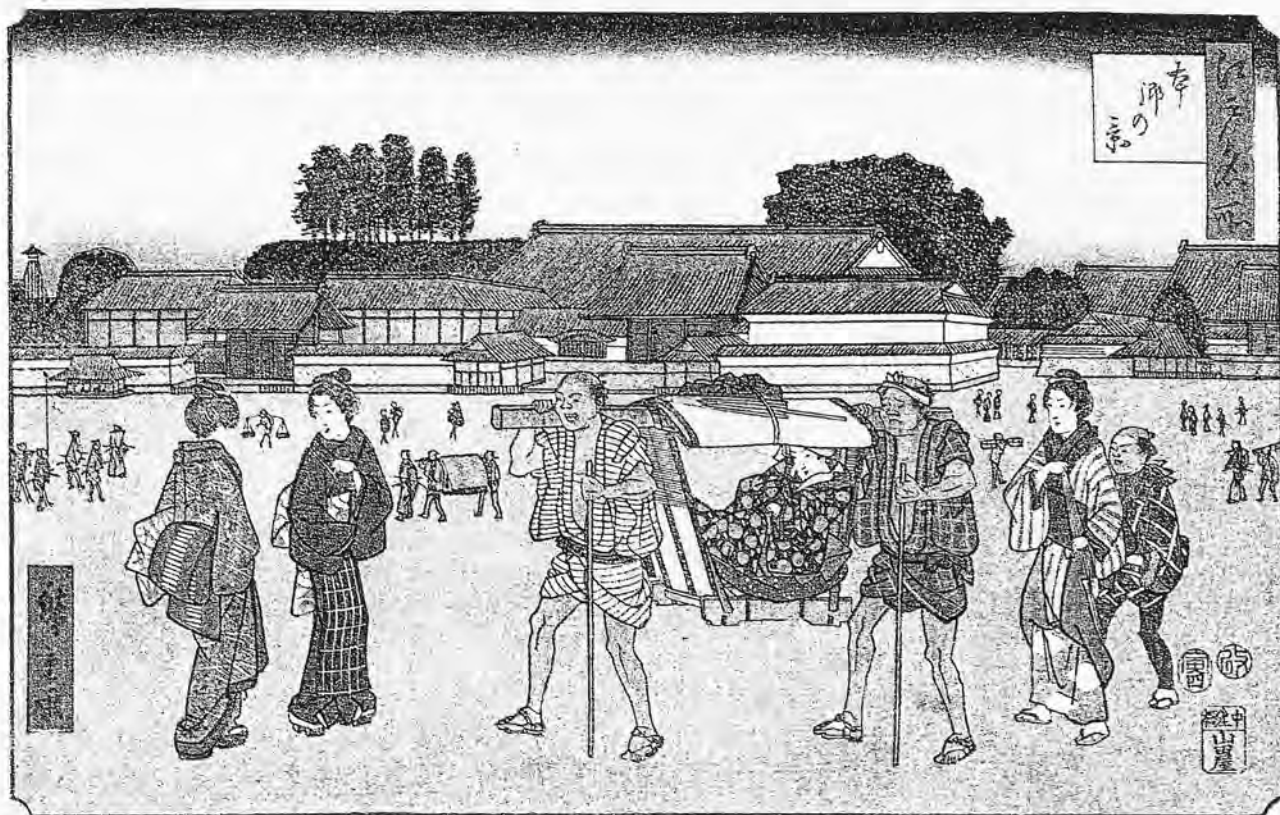


平成 13 年度
近世史料館冬季展

加賀藩の江戸藩邸

期間：平成 14 年 1 月 12 日（土）～ 3 月 28 日（木）
場所：金沢市立玉川図書館 近世史料館 展示室



江戸名所 本郷の景（『広重江戸風景版画大聚成』より）

金沢市立玉川図書館 近世史料館

はじめに

大名の江戸藩邸

江戸時代、幕府は大名との主従関係を明確にし、中央への権力集中を図るため、諸大名の妻子を江戸に居住させ、参勤交代を義務付けた。そのため大名は、江戸に居住するための屋敷地を幕府から拝領し、藩の江戸役所としての機能も含む藩邸とした。藩邸は主に上屋敷・中屋敷・下屋敷から成る。上屋敷は藩主やその家族が住む公邸、中屋敷は隠居した藩主や嗣子の住居であるとともに、上屋敷が罹災したときの臨時の邸宅となった。江戸の周辺に与えられた下屋敷は、災害の避難場所である一方、休息用の別邸として使用された。藩邸の敷地内には、藩主家族の住む御殿、藩士が住む長屋・諸役所・蔵・馬場などがあり、大藩では5000～6000人の藩士が居住していたという。

加賀藩の江戸藩邸

加賀藩の江戸藩邸は、慶長10年（1605）、3代藩主前田利常が家康より和田倉門外の辰口に屋敷を賜ったのが始まり。これより前、慶長5年（1600）以来、芳春院が人質として江戸に在ったが、その時代の邸宅の所在ははっきりしない。元和2～3年（1617～8）頃には、本郷に屋敷地を拝領してこれを下屋敷とし、辰口邸を上屋敷と定めている。その後、明暦3年（1657）・天和2年（1682）の大火による焼失、及び拝領・上地（拝領した土地を幕府へ返上すること）を経て、天和3年（1683）には、本郷邸が上屋敷、駒込邸が中屋敷、平尾邸が下屋敷と定められた。このほか、江戸で売買・消費する米を収納した蔵屋敷が深川黒江町にあった。この蔵屋敷は、幕府から拝領した土地ではなく、町人などの地主から藩が買い上げたもので、これを抱屋敷という。なお詳しい変遷は、別表「加賀藩江戸藩邸の沿革」に記載した。

御成について

御成とは、将軍・摂家・宮家など貴人の他出や訪問のこと。江戸時代では、将軍の日光社参や諸大名の邸宅訪問などがそれにあたる。大名邸への御成は、主従関係の確認と強化という意味を持っていたと考えられ、3代将軍家光と大御所秀忠の時が最も多かった。前田家への御成は、2代秀忠、3代家光、5代綱吉、11代家斉が行なっている。将軍の御成は、大名にとって最高の名誉であったため、饗応の限りを尽くして迎え、能や茶湯を催し、進上物を用意した。また、御成のためにわざわざ御殿や門が新築された。

展 示 品 解 説

江戸図

- 1 泰平御江戸絵図 嘉永(1848～53)再版 彩色木版 21.2-177
奥村喜兵衛元板、高井蘭山校訂。書林は尚古堂岡田屋嘉七ほか2名。江戸城の北から北西にかけて、「加賀殿(かざどの)」と記された加賀藩の上・中・下屋敷が分布している。中山道沿いに中・下屋敷が並び、同道と日光御成街道が分岐する手前に上屋敷が存在している。なお、隅田川河口の深川黒江町にある加賀藩の蔵屋敷は、この図では見当たらない。
- 2 小石川・谷中 本郷湯島絵図(『東都割絵図』より) 万延2年(1861)改正 彩色木版 13.9-143-9
戸松昌訓図。尾張屋清七板元。携帯用の江戸切絵図に描かれた本郷の上屋敷。隣接して水戸藩の中屋敷がある。本藩藩邸「加賀中納言殿」の東南に見られる「松平飛騨守」、「松平大蔵大輔」は、それぞれ大聖寺藩、富山藩の江戸藩邸を示す。
- 3 染井王子 巢鴨絵図(『東都割絵図』より) 嘉永7年(1854)新刻 彩色木版 13.9-143-16
戸松昌訓図。尾張屋清七板元。駒込及び平尾の加賀藩の中・下屋敷が描かれている。下屋敷がある板橋は、中山道の起点の宿場町。平尾・上・中の三宿で構成されている。この図では、下屋敷は中屋敷より小さく描かれているが、実際は約10倍の広さを有していた。

藩邸沿革

- 4 東邸沿革図譜 文政6年(1823) 富田景周著 16.18-128
加賀藩の江戸藩邸の沿革を、著者自身の考証をまじえて図入りで著述したもの。富田景周は禄高2500石の加賀藩士。11代治脩の治世の下、文政元年(1818)に職を辞するまで、小松城番、御算用場奉行などを歴任した。加賀藩の地理や歴史に精通し、他に『越登賀三州志』などの著作がある。展示は、史料上で確認できる最初の江戸藩邸・辰口邸の位置を示した部分図。

上屋敷

- 5 江戸本郷上屋敷之図 年代不明 彩色一枚 16.18-134
本郷邸の全体図。中央に御殿、庭園があり、その周りに江戸詰の藩士が居住する長屋(御貸小屋)が存在する。庭園の東側に見られる「梅之御殿」は、享和2年(1802)に、10代重教室寿光院の住居として新築された御殿である。寿光院の死後、11代治脩室法梁院が文政2年(1819)に死去するまで、この御殿に居住した。
- 6 前田家本郷屋敷之図 年代不明 彩色一枚 095.33-42

史料5と同じく本郷邸の全体図。年代は不明だが、13代斉泰室溶姫の住居が描かれていることから、その入興（文政10年（1827））以降のものと思われる。史料5と比較すると、庭園の南西から西、本郷の北の方角に御殿や表御門が増築されているのがわかる。この部分が溶姫の御住居で、將軍家の息女を正室として迎える場合、このように御殿や門を新築した。また、史料5で梅之御殿のあった場所は、馬場となっている。

7 江戸本郷邸年寄中之小屋図 年代不明 朱入一枚 16.18-172

江戸藩邸に勤務する藩士は、敷地内の御貸小屋という長屋に居住していた。当史料は、年寄役を勤める高禄の藩士の住居。東西に細長い小屋には、藩士自身とその家来である小者や給人が、ともに暮らしていた。

8 江戸御厩之惣図 文化3年(1806)写 朱入一枚 16.18-175

享和2年(1802)図の写。同年5月、厩を西之口御門外へ移動した後、上屋敷内本郷通りに面してあった厩の図。図によれば、この厩では50頭の馬をつなぐことができた。

中屋敷

9 藤田内蔵允書状控 7月 16.18-197

前田帯刀宛書状の控。藤田内蔵允安勝は、知行1500石で吉徳御附などを勤めた加賀藩士。前田帯刀孝矩は七日市藩初代利孝の次男で、知行2500石の旗本である。

内容は、清泰院（4代光高室）死後、牛込邸（中屋敷）が無断で尾張徳川家に譲られていたことに對し、利常が老中松平伊豆守信綱に異議を申し立てた一件について記す。結局、牛込邸を幕府へ収納し、代わりに本郷及び駒込の地6万坪を拝領することとなった。書状の最後で、その内の一部(1000歩余)が、帯刀に与えられることになったことを伝えている。

10 中屋敷図 年代不明 彩色一枚 16.18-183

駒込にある中屋敷の全体図。色紙で示された御小屋・仮小屋・長屋・馬場などが、整然と配置されている様子が窺われる。御殿の部分は空白になっている。

11 中屋敷絵図（間取図） 年代不明 彩色一枚 16.18-181-2

中屋敷の御殿の間取図。藩主やその家族が常時住む公邸としての上屋敷に對し、中屋敷は隠居した藩主や嗣子などが居住し、また上屋敷が火事などの災害に遭った場合には、避難場所及び臨時の公邸としての機能を果たした。

下屋敷

12 下屋敷御林大綱之絵図(江戸下屋敷絵図) 文政7年(1824) 彩色一枚 16.18-194-3

下屋敷の敷地の全体が絵画的に描かれている。広大な敷地内には築山や池が配され庭園として形作られる一方、上屋敷に供給するための竹木や野菜が栽培されていた。下屋敷は、藩主やその家族の遊興・保養の場として使用されたが、江戸時代末期には、時代を反映し、その広大な敷地を利用して軍

事調練や砲術稽古が行われている。

蔵屋敷

- 13 深川御蔵屋敷絵図 享和2年(1802) 天保12年(1841)加筆 彩色一枚 16.18-198-2

幕府の命により御絵図御作事所で作成したものの写。屋敷地は、総面積2668坪の内、2237坪が代官所支配の百姓地で、残りが町奉行所支配地であった。

御蔵屋敷には、国許から輸送、あるいは他藩より買い上げられた米が収められ、藩邸の御台所や、江戸詰藩士の扶持米として使用された。

御成

- 14 御成次第等写 明治年間写 16.13-27

小笠原家蔵巻子の写本。文禄・慶長年間の太閤秀吉の御成、元和期の将軍秀忠の御成、そのほか入内・参内の行列次第について記す。展示は、元和3年(1617)5月13日、秀忠が利常の辰口邸に御成の際、御成書院での饗応の献立を記した部分。

- 15 将軍様相国様御成之次第 18世紀前半写 16.13-30

寛永6年(1629)4月26日・29日、将軍家光と大御所秀忠(相国様)が利常の本郷邸に御成の記録。家光の御供として、実弟駿河大納言秀長、橘(立花)飛騨守宗茂、藤堂和泉守高虎が随行し、秀忠には水戸中納言頼房、同じく橘と藤堂の2名が従っていた。展示は、利常(肥前守)より将軍への進上物の目録。太刀・馬・金・呉服などが見られる。

- 16 御成一巻 文政10年(1827)写 16.13-38

元禄15年(1702)4月26日、将軍綱吉の本郷邸御成の記録。前年12月22日の上意に始まり、8月19日の御客能まで記されている。筆者は前田貞事か。史料の展示部分は、本郷邸で将軍綱吉自らが論語(孔子の性行や思想を記した書)を講じ、能を演じたことを伝えている。また綱紀も、将軍直々の命により、大学(儒教の経書)を講釈している。

藩邸運営

- 17 深川御蔵屋敷御払二付小人役共御憐愍之御沙汰願 慶応4年(1868) 090-1026-1

慶応4年(明治元年)4月、深川蔵屋敷の小人役(雑役等に従事する武家奉公人)治平・六左衛門兩人より、江戸藩邸の役人へ差し出された願書。この年1月、鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍は敗退し、4月11日には官軍が江戸城を開城している。このような政権交代の動きの中、加賀藩の深川蔵屋敷は廃止される。当史料では、失職した元小人役達が藩に何らかの救済措置を求めている様子が窺われる。

- 18 加州御屋敷様御出入書物御用願并許可状 明治2年(1869) 090-1026-8

本町4丁目の本屋上州屋惣七が、加賀藩江戸屋敷へ書物を販売する許可を願い出たもの。当史料によれば、上州屋は主に西洋書や翻訳書を取り扱っており、最近では中外新聞の出版や公議所日誌の販

売も手がけていた。『中外新聞』は、明治元年初めて日本人により創刊された新聞で、『公議所日誌』は、当年3月、明治新政府によって創刊された公議所の議事録である。加賀藩からの許可状には、中外新聞等は会議局などで必要とするだろうから、願いを聞き届ける旨が記されている。

- 19 加州様御買上地町入用残金下ヶ渡嘆願書 明治2年(1869) 090-1026-7
本郷邸門前の本郷5・6丁目には加賀藩の買い上げ地があり、当地にかかる町入用や公役は、藩から費用が下げ渡され、町名主である内田源右衛門が請け負っていた。明治維新後、藩の買い上げ地は各町に返却され、町名主制も廃止となる。そのため、内田の請負人の役目も解消されたが、当願書からは、昨年分の藩からの支払いが一部滞っており、残金支払いを催促する元請負人の姿が浮び上がってくる。

- 20 江戸屋敷在住書 享保6年(1721) 16.26-138
享保5年における江戸藩邸在住藩士の名簿。上・中・下屋敷の足軽・小者まで含めた総人数は、約2740名である。

- 21 御算用場奉行より指出候惣御借財高等調理帳之写 安政6年(1859) 16.48-283
奥村栄通写。安政6年正月、前年より繰り越した藩の借財(借金)を、地廻(国許)・大坂・江戸別に書き上げたもの。江戸での借財は8065貫394匁4分4厘、地廻・大坂を合わせた総借財高は71452貫217匁4分5厘8毛で、前年正月時の借財高よりわずかに減っている。

絵画に見る藩邸

- 22 江戸天下祭図屏風(『北国新聞』より複製) 年代不明 六曲一双 個人蔵
日吉山王権現の祭礼(山王祭)の行列が、江戸城内を通過する情景を描いたもの。将軍が上覧する山王祭は、神田明神の祭(神田祭)と並び天下祭と称された。明暦3年(1657)1月の大火直前の江戸城及び大名屋敷の様子がわかる。大手門前に、当時加賀藩の上屋敷であった辰口邸が描かれている。展示はその部分を拡大したもの。

- 23 江戸図屏風(複製) 年代不明 六曲一双 国立歴史民俗博物館蔵
明暦大火以前の江戸の様子を描いたもの。当時加賀藩の下屋敷だった本郷邸が描かれている。周囲に長屋を配し、二階櫓門・隅櫓を設けるなど、戦時の防衛を意識した造りとなっている。ほかに、屋敷を訪問する将軍を迎えるために造られた豪華な御成門が描かれている。

- 24 東都本郷月之光景(『広重江戸風景版画大聚成』より複製) 弘化4年~嘉永5年(1847~52) 721.8-1
初代歌川広重作、上州屋金蔵版元。大判三枚続の錦絵。一枚ずつ前景に美人を配し、三枚続きで背景に月に照らされた本郷邸が浮び上がる。描かれたのは、本郷通りに面した大御門から赤門、北火之見櫓の部分。赤門は、13代齊泰に將軍家息女浴姫が嫁いだ時に建てられた。江戸時代後期から明治初期の錦絵に度々描かれており、当時江戸の名勝の一つとして認識されていたことが窺われる。

展 示 品 解 説

江戸図

- 1 泰平御江戸絵図 嘉永(1848～53)再版 彩色木版 21.2-177
奥村喜兵衛元板、高井蘭山校訂。書林は尚古堂岡田屋嘉七ほか2名。江戸城の北から北西にかけて、「加賀殿(かざどの)」と記された加賀藩の上・中・下屋敷が分布している。中山道沿いに中・下屋敷が並び、同道と日光御成街道が分岐する手前に上屋敷が存在している。なお、隅田川河口の深川黒江町にある加賀藩の蔵屋敷は、この図では見当たらない。
- 2 小石川・谷中 本郷湯島絵図(『東都割絵図』より) 万延2年(1861)改正 彩色木版 13.9-143-9
戸松昌訓図。尾張屋清七板元。携帯用の江戸切絵図に描かれた本郷の上屋敷。隣接して水戸藩の中屋敷がある。本藩藩邸「加賀中納言殿」の東南に見られる「松平飛騨守」、「松平大蔵大輔」は、それぞれ大聖寺藩、富山藩の江戸藩邸を示す。
- 3 染井王子 巢鴨絵図(『東都割絵図』より) 嘉永7年(1854)新刻 彩色木版 13.9-143-16
戸松昌訓図。尾張屋清七板元。駒込及び平尾の加賀藩の中・下屋敷が描かれている。下屋敷がある板橋は、中山道の起点の宿場町。平尾・上・中の三宿で構成されている。この図では、下屋敷は中屋敷より小さく描かれているが、実際は約10倍の広さを有していた。

藩邸沿革

- 4 東邸沿革図譜 文政6年(1823) 富田景周著 16.18-128
加賀藩の江戸藩邸の沿革を、著者自身の考証をまじえて図入りで著述したもの。富田景周は禄高2500石の加賀藩士。11代治脩の治世の下、文政元年(1818)に職を辞するまで、小松城番、御算用場奉行などを歴任した。加賀藩の地理や歴史に精通し、他に『越登賀三州志』などの著作がある。展示は、史料上で確認できる最初の江戸藩邸・辰口邸の位置を示した部分図。

上屋敷

- 5 江戸本郷上屋敷之図 年代不明 彩色一枚 16.18-134
本郷邸の全体図。中央に御殿、庭園があり、その周りに江戸詰の藩士が居住する長屋(御貸小屋)が存在する。庭園の東側に見られる「梅之御殿」は、享和2年(1802)に、10代重教室寿光院の住居として新築された御殿である。寿光院の死後、11代治脩室法梁院が文政2年(1819)に死去するまで、この御殿に居住した。

6 前田家本郷屋敷之図 年代不明 彩色一枚

095.33-42

史料5と同じく本郷邸の全体図。年代は不明だが、13代斉泰室溶姫の住居が描かれていることから、その入興（文政10年（1827））以降のものと思われる。史料5と比較すると、庭園の南西から西、本殿の北の方角に御殿や表御門が増築されているのがわかる。この部分が溶姫の御住居で、將軍家の息女を正室として迎える場合、このように御殿や門を新築した。また、史料5で梅之御殿のあった場所は、馬場となっている。

7 江戸本郷邸年寄中之小屋図 年代不明 朱入一枚

16.18-172

江戸藩邸に勤務する藩士は、敷地内の御貸小屋という長屋に居住していた。当史料は、年寄役を勤める高禄の藩士の住居。東西に細長い小屋には、藩士自身とその家来である小者や給人が、ともに暮らしていた。

8 江戸御厩之惣図 文化3年(1806)写 朱入一枚

16.18-175

享和2年(1802)図の写。同年5月、厩を西之口御門外へ移動した後、上屋敷内本郷通りに面してあった厩の図。図によれば、この厩では50頭の馬をつなぐことができた。

中屋敷

9 藤田内蔵允書状控

7月

16.18-197

前田帯刀宛書状の控。藤田内蔵允安勝は、知行1500石で吉徳御附などを勤めた加賀藩士。前田帯刀孝矩は七日市藩初代利孝の次男で、知行2500石の旗本である。

内容は、清泰院（4代光高室）死後、牛込邸（中屋敷）が無断で尾張徳川家に譲られていたことに対し、利常が老中松平伊豆守信綱に異議を申し立てた一件について記す。結局、牛込邸を幕府へ収納し、代わりに本郷及び駒込の地6万坪を拝領することとなった。書状の最後で、その内の一部（1000歩余）が、帯刀に与えられることになったことを伝えている。

10 中屋敷図 年代不明 彩色一枚

16.18-183

駒込にある中屋敷の全体図。色紙で示された御小屋・仮小屋・長屋・馬場などが、整然と配置されている様子が窺われる。御殿の部分は空白になっている。

11 中屋敷絵図（間取図） 年代不明 彩色一枚

16.18-181-2

中屋敷の御殿の間取図。藩主やその家族が常時住む公邸としての上屋敷に対し、中屋敷は隠居した藩主や嗣子などが居住し、また上屋敷が火事などの災害に遭った場合には、避難場所及び臨時の公邸としての機能を果たした。

下屋敷

12 下屋敷御林大綱之絵図(江戸下屋敷絵図) 文政7年(1824) 彩色一枚

16.18-194-3

下屋敷の敷地の全体が絵画的に描かれている。広大な敷地内には築山や池が配され庭園として形作られる一方、上屋敷に供給するための竹木や野菜が栽培されていた。下屋敷は、藩主やその家族の遊興・保養の場として使用されたが、江戸時代末期には、時代を反映し、その広大な敷地を利用して軍事訓練や砲術稽古が行われている。

蔵屋敷

- 13 深川御蔵屋敷絵図 享和2年(1802) 天保12年(1841)加筆 彩色一枚 16.18-198-2

幕府の命により御絵図御作事所で作成したものの写。屋敷地は、総面積2668坪の内、2237坪が代官所支配の百姓地で、残りが町奉行所支配地であった。

- 14 深川御蔵米調べ帳 文化8年(1811) 16.48-157

文化7年の深川御蔵米の出入りを記した御勝手方の帳面。国許から輸送、あるいは他藩より買い上げられた米が蔵に収められ、藩邸の御台所や、江戸詰藩士の扶持米として使用された。

御成

- 15 御成次第等写 明治年間写 16.13-27

小笠原家蔵卷子の写本。文禄・慶長年間の太閤秀吉の御成、元和期の将軍秀忠の御成、そのほか入内・参内の行列次第について記す。展示は、元和3年(1617)5月13日、秀忠が利常の辰口邸に御成の際、御成書院での饗応の献立を記した部分。

- 16 将軍様相国様御成之次第 18世紀前半写 16.13-30

寛永6年(1629)4月26日・29日、将軍家光と大御所秀忠(相国様)が利常の本郷邸に御成の記録。家光の御供として、実弟駿河大納言秀長、橘(立花)飛騨守宗茂、藤堂和泉守高虎が随行し、秀忠には水戸中納言頼房、同じく橘と藤堂の2名が従っていた。展示は、利常(肥前守)より将軍への進上物の目録。太刀・馬・金・呉服などが見られる。

- 17 御成一巻 文政10年(1827)写 16.13-38

元禄15年(1702)4月26日、将軍綱吉の本郷邸御成の記録。前年12月22日の上意に始まり、8月19日の御客能まで記されている。筆者は前田貞事か。史料の展示部分は、本郷邸で将軍綱吉自らが論語(孔子の性行や思想を記した書)を講じ、能を演じたことを伝えている。また綱紀も、将軍直々の命により、大学(儒教の経書)を講釈している。

藩邸運営

- 18 江戸屋敷在住書 享保6年(1721) 16.26-138

享保5年における江戸藩邸在住藩士の名簿。上・中・下屋敷の足軽・小者まで含めた総人数は、約2740

名である。

19 御歩並以上御在所諸人名書 嘉永2年(1849) 16.26-142

御歩並以上の江戸定詰藩士の名簿。御歩並以上の藩士の総数は266名。足輕小者の1920名をあわせて、総勢2186名が常時藩邸に起居していたことがわかる。

20 於江戸勤方 享和2年(1802)写 16.27-222

享保13年(1728)1月21日、前年まで御奏者番を勤めていた前田将監恒篤が、江戸詰の御奏者番の勤務について書き留めたものを、享和2年当時同役だった竹田掃部忠周らが写した。御奏者番は、主に、上使(幕府の使者)や他藩からの使者・家中・出入りの商人などと藩主の間の取次ぎを役目とした。

21 江戸御入用入払本勘指引覚 天明9年(1789) 16.48-124

御勝手方による天明8年分の江戸表の収支計算。収入は、国許や大坂からの仕送り等で5650貫800目、支出は5190貫700目で、差引き459貫800目が翌9年に繰り越されることになっている。

22 御算用場奉行より指出候惣御借財高等調理帳之写 安政6年(1859) 16.48-283

奥村栄通写。安政6年正月、前年より繰り越した藩の借財(借金)を、地廻(国許)・大坂・江戸別に書き上げたもの。江戸での借財は8065貫394匁4分4厘、地廻・大坂を合わせた総借財高は71452貫217匁4分5厘8毛で、前年正月時の借財高よりわずかに減っている。

絵画に見る藩邸

23 江戸天下祭図屏風(『北国新聞』より複製) 年代不明 六曲一双 個人蔵

日吉山王権現の祭礼(山王祭)の行列が、江戸城内を通過する情景を描いたもの。将軍が上覧する山王祭は、神田明神の祭(神田祭)と並び天下祭と称された。明暦3年(1657)1月の大火直前の江戸城及び大名屋敷の様子がわかる。大手門前に、当時加賀藩の上屋敷であった辰口邸が描かれている。展示はその部分を拡大したもの。

24 江戸図屏風(複製) 年代不明 六曲一双 国立歴史民俗博物館蔵

明暦大火以前の江戸の様子を描いたもの。当時加賀藩の下屋敷だった本郷邸が描かれている。周囲に長屋を配し、二階櫓門・隅櫓を設けるなど、戦時の防衛を意識した造りとなっている。ほかに、屋敷を訪問する将軍を迎えるために造られた豪華な御成門が描かれている。

25 東都本郷月之光景(『広重江戸風景版画大聚成』より複製) 弘化4年~嘉永5年(1847~52) 721.8-1

初代歌川広重作、上州屋金蔵版元。大判三枚続の錦絵。一枚ずつ前景に美人を配し、三枚続きで背景に月に照らされた本郷邸が浮び上がる。描かれたのは、本郷通りに面した大御門から赤門、北火之見櫓の部分。赤門は、13代斉泰に将軍家息女溶姫が嫁いだ時に建てられた。江戸時代後期から明治初期の錦絵に度々描かれており、当時江戸の名勝の一つとして認識されていたことが窺われる。

前田帶刀殿江遣候紙面之控

牛込辺 尾張様御屋敷近所二

先年 清泰院様御屋敷在之候、

其頃龍口上屋敷・本郷唯今之屋敷

迄二而、龍口之屋敷ハ上屋敷本郷之

屋敷を下屋敷与申候、右 清泰院様

御屋敷を加賀守殿中屋敷二被遣度

旨從 清泰院様御願被成、則加賀守殿

中屋敷二罷成、右之屋敷二者国許より

相越罷在候家老中等之証人并

江戸引越之者共被指置候、然処

清泰院様御逝去被遊酉ノ年火事

以後 尾張様より右之屋敷御願之由二而

尾張様御拝領被成候、就夫 微妙院様

御意被成候ハ 清泰院様御逝去被遊候而

茂一度加賀守江被下候屋敷を此方へ

御案内茂無之 尾張様へ被遣候儀、ケ様二ハ

在之間敷事二候旨、松平伊豆守殿江

被仰遣候処、殊之外御行当加賀守殿へ

被下候儀、御老中方二も御失念

清泰院様御屋敷二而候故御逝去之上二ハ

御指上被成候義与御心得之様子二而、

不首尾成義二罷成候得共、此儀者

御老中方より被 仰分在之、其分二

罷成在之候、然所右中屋敷之代

「一町本郷湯嶋辺望次第可

被遣旨被仰越、其後近藤登之助殿

屋敷之後、則登之助殿御組与力同心

屋敷二而弐万坪、唯今駒込之屋敷之

所二而四万坪被致拝領候、右牛込之

屋敷者六万坪余在之由、唯今御自分様

御屋敷之所二而帶刀殿江右六万坪之

余リ千步余在之候を被遣度由

微妙院様より松平伊豆守殿江被仰入、則

此方之屋敷步数之内二而御拝領被成

「一与奉存候、右私覚之趣書記懸

御目申候、以上

七月

藤田内蔵允

前田帶刀様

加賀藩江戸藩邸の沿革

年号	西暦	辰口邸(上)	筋違邸(上)	本郷邸(下一上→中)	築地邸(上)	相生橋邸	牛込邸(中)	駒込邸(中→抱)	平尾邸(下)	深川蔵屋敷	切通邸(抱)	永代島邸(抱)	地蔵島邸(抱)	深川邸(抱)
面積(歩)		8710	9009	103822	10160	7640余	60000	20666	217935	2668	4480	31714	23000余	32292
慶長10	1605	利常、家康より江戸城和田倉門外に邸地を拝領。										この頃、抱屋敷とするか。米蔵を置く。		
元和初	1615													
元和2・3	1617-8			この頃、利常、幕府より拝領か。下屋敷とする。										
元和3	1617	5・13 秀忠御成。												
寛永3	1626			周囲を木柵で囲む。										
寛永4	1627			利常の子女・生母ら、金沢より移住。										
寛永6	1629			4・26 家光御成。4・29 大御所秀忠御成。										
寛永9	1632	12・27 類焼。利常、本郷邸に避難。		12・29 辰口邸焼により、利常避難。										
寛永10	1633	冬、再建。12・5 家光養女大姫、光高に入典。		利常、当邸に在し、辰口邸の再建を指揮。										
寛永16	1639			6 利常、隠居。										
寛永17	1640			3・28 家光御成。							この頃、抱屋敷とするか。			
正保2	1645						この頃、拝領か。中屋敷とする。							
慶安3	1650			4・19 富士塚より出火、延焼。										
慶安4	1651			8・21 再建。										
明暦3	1657	1・19 焼失。綱紀本邸邸避難。5・14 幕府へ上地。	5・21 綱紀、幕府より筋違外に邸地を拝領。	1・19 辰口邸焼失により、綱紀避難。以後、綱紀当邸に在す。20000歩拝領。			5・14 前年清泰院遷去につき、幕府に上地。	幕府より40000歩拝領。別に8954歩・40000歩を借りる。中屋敷とする。		3 2432歩購入。米蔵を置く。	1・19 類焼	米蔵を深川へ移す。1・19 類焼		
万治3	1660													
寛文10	1670													
延宝7	1679										1・14 類焼			
延宝8	1680										3・14 購入			
天和2	1682							3 20000歩上地。						
天和3	1683		12・28 焼失 春 幕府へ上地。	12・28 類焼。綱紀、駒込邸に避難。 3・21 上屋敷と定める。				12・28 類焼。また本郷邸焼失により、綱紀避難。春、17330歩余上地。	2 幕府より60000歩拝領140605歩余借領。 3・21 140605歩余拝領。下屋敷と定める。 11 17330歩拝領。			幕府へ上地。 (但、出税地として有する)	幕府へ上地。 (但、出税地として有する)	幕府へ上地。 (但、出税地として有する)
貞享3	1686													
貞享4	1687													
元禄4	1691			殿閣完成し、9・19 綱紀移住。 焼失。綱紀駒込邸に避難。								4・23 幕府へ上地。	4・23 幕府へ上地。	4・23 幕府へ上地。 (享保12頃まで存在か)
元禄8	1695							綱紀、本郷邸焼失により駒込邸避難。 4・23 40000歩余上地。餘地として6200歩余拝領。						
元禄15	1702													
元禄16	1703			4・11 御成閣殿落成。4・26 綱吉御成。 11・29 類焼。御成御殿焼失。										
宝永5	1708			11・18 徳川綱吉養女松姫、吉徳に入典。御守殿完成。										
享保3	1718													
享保6	1721			吉徳、駒込邸類焼により避難。御守殿撤去。				10・21 吉宗鷹狩の折、立寄る。 3 類焼。吉徳、本郷邸に避難。						
享保9	1724													
享保15	1730													
元文1	1736			1・12 焼失										
元文3	1738			1・29 大聖寺道場より出火。御作事所など焼失				10 宗辰、金沢より移住。						
宝暦10	1760													
明和7	1770													
天明6	1786													
文政8	1825			12・9 失火。北之居宅焼失。						類焼				
文政10	1827			11・27 徳川家斉娘海姫、斉泰に入典。 3・13 家斉御成。 1・15 火見櫓など焼失。 3・21 家慶御成。						2 土蔵一棟類焼 8・11 米蔵類焼 1・22 米蔵類焼				
文政11	1828													
弘化3	1846													
嘉永3	1850													
安政1	1854													
安政2	1855			10・2 大地震により損傷										
明治1	1868			10・17 焼失。10 朝廷より拝領。中屋敷とする。 8 官邸と定める。	12・24 朝廷より拝領。上屋敷とする。 5・9 政府へ上地。	5・9 拝領		10・2 大地震により損傷 抱屋敷となる。 2・15 政府へ上地。	3・5 類焼 10 朝廷より拝領。 8 私邸と定める。		10・2 大地震により損傷			
明治3	1870													
明治4	1871													

(上)は上屋敷、(中)は中屋敷、(下)は下屋敷、(抱)は抱屋敷を表す。